近代兵庫の和風別荘と邸宅

－兵庫県近代和風建築総合調査３－

はじめに　明治期以降、近代産業の勃興は財閥関係者や新興実業家など新しい富裕層を生み出した。本稿は、こうした階層の人々がこぞって建設した和風別荘・邸宅に焦点を当て、西洋化という切り口だけでは捉えられない兵庫県の近代化の多様な側面を概観してみたい。その一例として、本稿が対象とするのは、阪神間と並んで郊外住宅地として知られる、現在の神戸市垂水区に属する舞子地域である。

別荘・邸宅における和風　まず、近代住宅建築における和風の位置づけについて概観しておく[1)]。住宅における近代化は、和洋館並列という形で財閥関係者や新興実業家ら上流階級の邸宅に表れた。明治中期には、和館を日常生活に用い、洋館を接客空間とする使い分けが定着する。しかし、明治後期以降、書院造の和館や茶室に接客機能を担わせる形式の和洋館並列型邸宅や、和館だけで構成される邸宅も現れ、時代の経過とともに和風へと回帰する傾向がみられる。ただし、それは洋風の生活様式の駆逐というよりも、和風住宅の一部に内外洋風の応接室を併設したり、和風の外観でありながら内部を一部洋室としたりするなど、和風が洋風を包摂する過程であった。

別荘地としての舞子　神戸市西部の須磨から舞子にかけての地域では、近代以降別荘地として開発が始まる。海に落ち込む六甲山系から西へ続く海岸段丘がなす地形と、砂浜、松林、対岸の淡路島がなす風景により風光明媚の地として人気を集めた。この地の開発の端緒は、明治27年（1894）に有栖川宮熾仁親王が舞子の丘陵に和風別邸（現存せず）を構えたことと、明治30年（1897）以降居留外国人が別荘地を求めて須磨・一の谷や塩屋に進出したことである。これらの敷地はいずれも海を見下ろす眺望を求めて高台が選ばれた。一方、明治29年（1896）の山陽鉄道舞子公園停車場（現JR山陽本線舞子駅）の開業や明治33年（1900）の舞子公園の開園にともない、舞子浜に面する西国街道沿いにも旅館や別荘が建ち並び、賑わいをみせる。このように、舞子地域の別荘地は明石海峡を望む高台と、海岸に面した街道沿いの２つに大別できる。これらはほぼ並行して開発が始まるが、大正期から昭和戦前期にかけて開発の中心は土地開発業者が入るなどして山間部へと移動していく[2)]。

海浜に面した別荘　岸本家別邸は、大阪最大の銑鉄問屋であった岸本商店を経営する実業家岸本吉左衛門の別邸として建てられた。国道と旧海岸線に挟まれた河口に隣接する敷地に、和風の主屋と離れを北と南に配置する。とりわけ接客空間であった離れは南・東面の庭と海への眺望を意図した開放的な造りである（図48）。主屋は棟札より明治42年（1909）上棟と知られる。

建物はボイラー棟を除き、すべて和風で構成され、日常の生活空間と接客空間はともに和風であった。建物は、吟味された材料を要所で用い、床廻りや欄間、天井に精緻な意匠を施した数寄屋である。ただし、鉄板を内装に用いたビリヤード室を併設するほか、建物内各所にボイラー棟から送られる暖気の吹き出し口を設けるなど、生活様式や設備の点で近代化は確実に浸透している。

大工棟梁と建築家の和風　舞子ホテル（旧日下部家住宅）は海運業で名を馳せた日下部久太郎によって、舞子駅北方の南面する高台に大正中期に建てられた迎賓館兼別荘である。当初建てられたのは、洋館と西側に接続する和風の広間棟および家族の生活空間である桐の間棟であっ

図48　岸本家別邸離れ南面

図49　舞子ホテル（旧日下部家住宅）広間棟内部

た。そのうち横田彦左衛門という大工棟梁の手になる桁行９間梁間４間の広間棟は[3]、主体部の柱上の舟肘木が桁を受ける書院造で、折上格天井を張り、太いスギ絞り丸太の床柱、付書院、床脇を備えた床の間をもつ格式を誇り、総じて矩計を高くとった典型的な近代の和風接客空間である（図49）。庭と明石海峡への眺望を最大限に得るため、南・西面への開放感が際立つ。

昭和12年（1937）頃、これらの建物を用いて「舞子ホテル」として営業が開始され、続く昭和15年（1940）には厨房や客室が入る和風の新館や会議棟を増築した。増築部分を設計したのは、工手学校（現工学院大学）造家学科出身の佐藤信次郎という建築家であった[4]。新館は中廊下に面して客室が並び、入口廻りの踏込や格子引戸などにより独立性を高めた近代的な平面の旅館である。会議棟は外観を和風とするが、内部は窓廻りや照明に和風モダニズムを感じさせる折衷的な洋風の空間である（図50）。なお、現存しないが、既存建物のホテルへの用途変更にともない敷地北半部に日下部家のために新築された４棟からなる和風住宅も佐藤の設計であった。優麗な洋館がしばしば注目されるが、実際は敷地内の大部分が和風建築であったことになる。洋館に加えて大工棟梁による和館、近代的な教育を受けた建築家による和風旅館が併存する、和洋館並列型の稀有な事例である。

時局を反映した和風邸宅　舞子公園旧木下家住宅は、海運業者又野良助の自邸として建てられた。敷地は南面する傾斜地を造成したもので、庭を介し明石海峡に対して眺望を開く（図51）。主屋の東半部は昭和16年（1941）、西半部は昭和18年（1943）にそれぞれ分割して建てられた。これは昭和14年（1939）に制定された「木造建物建築統制規則」により、農家等の住宅は160㎡以下、一般住宅は100㎡以下に床面積が制限されたことへの対応とみられる。

建物はつし２階建の主屋に加え、茶室、土蔵、納屋などで構成される。主屋東南部には竣工後ほどなく洋風に改造された応接室が突出するが、建物はすべて和風の外観とする。内部意匠は長押の成を低くするほか、欄間廻りの枠を細くするか省略するなど、各部材の存在感を消そうとする意図がうかがえ、昭和期らしい洗練を見せる数寄屋である。時局による制約を受けながらも、近代和風邸宅のひとつの到達点を示す事例である。

おわりに　近代の開港場を擁する兵庫県の近代は、西洋化という側面から捉えられることが多い。阪神間や須磨・舞子などの郊外住宅地や別荘地の形成についても、外国人や新興実業家による洋風邸宅が牽引した面があるのは確かである。しかし一方で、そこには豊饒な和風建築の世界が広がる点も見逃せない。とりわけ、海への近さと眺望の視点の高さをあわせ持つ舞子地域は、眺望の水平的な広がりや庭との連続性などをもたらす開放的な和風建築の性格がより活きる条件が整っていた。野趣に富む舞子の地域的特性は和風建築にこそ顕著に表れたといえよう。

（松下迪生）

註

1）西和彦『日本の美術　第450号　近代和風建築』至文堂、2003。
2）尾崎光・足立裕司「神戸市舞子地域における住宅地形成に関する歴史的研究―土地所有の変遷に基づく考察を中心として」『日本建築学会近畿支部研究報告集　計画系』48、2008。
3）棟札より。
4）設計者名については設計図面より。佐藤の経歴については次に詳しい。瀬口哲夫「再見　東海地方の名建築家４岐阜建築界のパイオニア／佐藤信次郎」『ARCHITECT』2005－8、日本建築家協会東海支部。

図50　舞子ホテル（旧日下部家住宅）会議棟内部

図51　舞子公園旧木下家住宅